

アベノミクス考

入来院重朝



アベノミクスの是非について最近株価が、五月五日の高値二五、九四二円から黒田日銀総裁の異次元金融緩和と政策発表の四月四日当時の一二、八七七円まで急降下したのを見て、マスコミ等は騒いでいます。株価が乱高下するのは当たり前であり、今まで一本調子で上がってきたのですから、ここらで一先ず一服したのだろうと私は思います。

さて、アベちゃんとかれば思い出します。当誌三号に「百歳とともに」を私のセイ談として掲載しましたが、そこで彼をトッチャンボーヤだなど思ったと書いたのを確認しました。トッチャンボーヤだと思うのは今も変わ

りませんしそのボーヤ振りは増々イタについてきましたが、思えばかつての文字通りみっともない総理辞任に至った折りのボーヤにとって深刻な挫折感を体験したことが、彼を鍛え強くしたのでしょうか。数旬を閲し今又、時代はボーヤを呼びもどしたのです。

今年になって日本を取り巻く各国のトップがほぼ全員交替しました。オバマは留任しましたが、これは目下アメリカは国内が分裂中であり、この国内をなんとかまとめるためのボス達の苦肉の策だったのでしょうか。

アメリカの衰退は今や如何ともしがたく、ドルの世界支配がいつまで続くか、世界は固唾をのんで見ています。かたやヨーロッパの没落は云われて久しく、現在EUの混迷はその收拾の手立てを見失っているかのようです。こうして世界の潮流は今やアジアに向かって音を立てて流れています。今まさに世界は

変わろうとしている。この時にボーヤはアベノミクスを引っ提げて登場したのです。

さて六月の七、八両日米中のトップ即ち、オバマと習近平が約八時間にわたり米カリフォルニア州パームスプリング近郊の保養施設サニランズでアジア太平洋地域の新秩序をめぐる「広く深い議論」を重ね、信頼関係構築を図った。と新聞等で報道されています。報道は中々刺激的です。習近平が開口一番、太平洋を中米二国で分けどりしようとのたまわった。その意気はよしであります。

亡き貞子を通して親しくなった矢吹晋先生から三年前「凶説」中国力―その強さと脆さ―の著書をおくられたが、そのはしがきに、―チャイメリカ (Chimerica) すなわち「衰えたアメリカを支える元気のいいチャイナ」という構図は誰の目にも印象づけられ、G20の金融サミット等における中国の一挙手一投

足に、世界の耳目が釘付けされた。―とあるのを見て、全くうまいことを云うなと思ったのです。つまり彼の造語だと思えますが―チャイメリカとはよくも云ったもんだと感心したのです。元来、アメリカと支那は似た者同士仲が良かった。盧溝橋事件（1937年）に始まる日支事変はその実体はアメリカとの戦いだったことは知る者は知っています。当時の支那の空軍はその飛行機もパイロットもアメリカが供給していたのです。当時からしつかりと「チャイメリカ」だったのです。今やその主客が転倒しつつあるのです。

さてわがトツチャンボーヤはただ腕を拱いているわけではない。日本を取り戻すと彼は云っています。どうして取り戻せるのかお手前拝見とみなは観ています。ボーヤが何か云うのを待ってましたとばかり、今や、アメリカも勿論、中国も韓国も声を揃えてボーヤを

中傷攻撃しています。しかしながらボーヤは決して負けません。彼には日本を真に独立させる崇高な使命の自覚があります。

今や日米同盟の実体がだんだん明らかになつてきました。数々のこれにまつわる諸条約なかんずくいわゆるマツカーサー憲法ともどもこれらは、アメリカの日本永久占領政策の一環にすぎません。

さて驕れる者は久しからずアメリカ帝国も先が見えてきました。永久占領は夢まぼろしであります。ボーヤの使命は重大にして成し遂げるには余程の力輔と国民の支持がなければなりません。ありがたいことに我が国民はおろかではありません。

さて、セイ談3号をボーヤの件を確認のためなつかしく頁をくりましたが、ついでに皆さんの文章も読みました。そして亡き貞子の「人生無駄なことなし」をあらためて読み直

しました。この短文は中身が濃く、彼女の人生のエッセンスが凝縮しています。マサに彼女オன்றの人生です。「思えば私の人生は彼女の添えものにすぎなかった」としみじみ思いました。何事も一意専心、真剣に毎日を生きていたのだと、今更私にはすぎたスゴイカミサンだったと思ひ私のアホさを痛感するのです。

先月四日に貞子の三回忌を三男大圓の読経とともに執り行いました。当日は約束通り、笑福亭鶴瓶師匠が奥さん、弟子一人、マネージャー帯同四名で拙宅に見えられ、お弟子の前座つきで本人は「錦木検校」の一幕を供養されました。ありがたいことです。しみじみこの世はご縁のものだと思ふ次第です。(了)

(六月十一日記) (炉ばたセイ談庵主)



笑福亭鶴瓶師匠を囲んでの貞子さん三回忌法要親族記念写真



鶴瓶さんの追悼落語「錦木検校」